

ペット愛、親子の絆など泣ける短歌が集結！

「クリネックス涙腺短歌」応募殺到

想定約7倍・総応募数44,705首の頂点決定！受賞作品発表

審査員はヒコロヒー、歌人・木下龍也、文筆家・土門蘭

白熱の審査会レポート・インタビュー公開！

日本製紙グループの日本製紙クレシア株式会社（代表取締役社長：藤原隆史、本社：東京都千代田区）が展開する、175か国以上で愛されている世界的ブランド「クリネックス」は、心を揺さぶる短歌を募集したキャンペーン「クリネックス涙腺短歌」の入賞作品を、2026年8月31日（月）より本リリース及び特設サイトに発表いたします。

本コンテストでは、嬉しい涙、寂しい涙など“涙”をテーマにした心を揺さぶる短歌、題して「涙腺短歌」を募集しました。約2か月にわたるキャンペーン期間で寄せられた短歌は、応募総数44,705首。当初の想定6,500首を遥かに超える大きな反響となりました。審査員には、お笑い芸人のヒコロヒーさん、歌人の木下龍也さん、文筆家の土門蘭さんの3名をお迎えし、最終審査会を実施。厳正なる審査を経て、最優秀賞（1本）、優秀賞（5本）、審査員賞（15本）、佳作（30本）が決定いたしました。

審査会の様子のほか、各審査員のインタビューコメントも公開いたします。受賞作品への感想や選定理由に加え、ヒコロヒーさんには、最近涙しそうになった出来事を伺いました。



<「クリネックス涙腺短歌」特設サイト URL> <https://kleenex.crecia.jp/cp/ruisentanka/>

■「クリネックス涙腺短歌」結果について

昨今、SNS等において20代の若者やZ世代を中心に短歌ブームが到来していると言われています。博報堂生活総研（※）によれば、2026年は「感情ミュート社会」と呼ばれる時代で、自分の感情や気持ちを素直に出せる場が「減っている」と感じている生活者は63.8%と6割を超えたようです。こうした背景のもと、5・7・5・7・7の31文字に想いや感情をのせて短歌を詠む「クリネックス涙腺短歌」キャンペーンを実施。当初の想定6,500首を遥かに超える、約7倍となる44,705首の応募が集まり、大きな反響となりました。入賞作品は本リリース及び特設サイトにて発表します。

（※）リソース：<https://seikatsusoken.jp/seikatsuchishin2026/part2/>



【受賞作品について】

総応募数44,705首の中から、ヒコロヒーさん、木下龍也さん、土門蘭さんによる最終審査会を実施し、以下の通り各賞を決定しました。

■最優秀賞（1本）：賞金30万円

「そこだけが床は四角く色濃くて確かに猫は十二年いた」

■優秀賞（5本）：賞金5万円

「この家のドアみな少し開いていて 猫と暮らした日々のそのまま」

「電球も替えられるようになったからきみは誰かを照らしているよ」

「お母さんいつか私を忘れたら今度は友だちになってよね」

「だいすきな絵本のようにそばにいて愛されながらぼろぼろになる」

「花よりも花でしたけどほんとうに花になったらだめじゃないすか」

■審査員賞（それぞれ5本×3名 計15本）：賞金3万円

・ヒコロヒーさん

「犬がいてうたったうたを犬が消えたえばそれは犬がいるうた」

「ひやむぎのぴんくい奴に付けていた名前を今から呼ぶよ、せーの」

「さびしさを猿に預けてきたけれど猿がさびしくわたしもさびしい」

「あなたから貰った傷が腫れたならなるだけ永く腫めますように」

「一車両だけの電車をバカにしていたはずなのに地下鉄で泣く」

・木下龍也さん

「プリンには名前を書いておいたのに愛には書いてなかったせいで」
「早産でごめんと言えば保育器の小さな指が私をつかむ」
「【求】この瞬間きみを笑わせる方法【譲】わたしのすべて」
「河ふたつ渡り出勤するのです 風つよい日は電車遅れて」
「滝を見に行こうと話しながらもう光の中にいた曇りの日」

・土門蘭さん

「できあがる前にハグしてほしかったそしたらそういう機械になれた」
「生前に祖母が愛した花壇には今年も祖母を知らない雪が」
「火葬後の雨やわらかい シャンプーをしてくれたとき大好きだった」
「スーパーの全く同じ惣菜も母が買うのが美味しかったなあ」
「母でなく我として書く育児日記三十年後、友として待つ」

■佳作（30本） : クリネックス商品詰め合わせ
入賞作品は、特設サイトをご覧ください。



【最終審査会の様子】

最終審査会は、ノミネート作品がズラリと並び、緊張感あふれる会場で行われました。

審査員のヒコロヒーさん、木下龍也さん、土門蘭さんの3名は、それぞれが気に入った短歌に付箋を貼り、各テーブルを回りながら作品一つひとつの言葉とじっくり向き合いました。1首の短歌から広がる様々なドラマや背景の想像に、審査員同士が感嘆の声をあげる場面や、「広く届けられる短歌」「個人的に好き」といった熱い推し合いが繰り広げられる場面もありました。応募者の感情を丁寧に読み解きながら、審査員3名が悩みに悩んだ末、各賞が決定しました。



【「クリネックス涙腺短歌」 概要】※応募受付終了

■ 応募期間：2026年5月11日（月）00:00～6月30日（火）23:59

■ 応募方法：Xにて、「#クリネックス涙腺短歌」を付けて、5・7・5・7・7の短歌を投稿で応募完了。

※おひとり（1アカウント）あたり、100首までご応募可能。

【審査員について】

・ヒコロヒー



松竹芸能所属。2011年ピン芸人としてデビュー。独特の世界観とキャラクターで描く1人コントが人気で単独公演は毎回即完。バラエティ番組出演の他、ドラマ・映画出演、執筆やデザインまで幅広く活躍中。初の短編小説集「黙って喋って」（朝日新聞出版）が第31回島清恋愛文学賞を受賞。

・木下龍也



1988年山口県生まれ。歌人。歌集は『つむじ風、ここにいます』『きみを嫌いな奴はクズだよ』『オールア라운드ユー』『あなたのための短歌集』。その他、短歌の入門書『天才による凡人のための短歌教室』や谷川俊太郎との共著『これより先には入れません』など著書多数。2025年度NHK Eテレ「NHK短歌」選者。

・土門蘭



文筆家。1985年広島生まれ、京都在住。小説・短歌・エッセイなどの文芸作品や、インタビュー記事の執筆を行う。著書に「第一回生きる本大賞」を受賞した『死ぬまで生きる日記』他、『100年後あなたもわたしもいない日に』（寺田マユミ氏との共著）『経営者の孤独』、『戦争と五人の女』『そもそも交換日記』（桜林直子氏との共著）『ほんとうのことを書く練習「わたしの言葉」で他者とつながる文章術』。

■ 審査員インタビュー

審査員を務めた、ヒコロヒーさん、木下龍也さん、土門蘭さんに、受賞作品についての印象や選定理由などについて伺ったインタビューコメントを公開いたします。また、ヒコロヒーさんには最近泣けた瞬間についても伺いました。

【ヒコロヒーさんインタビュー】



—最優秀賞に選ばれた作品についてのコメントをお聞かせください。

喪失について描いている短歌が多く集まった中で、最優秀賞の作品は「喪失したことが存在している（存在していないことの存在）」を描いているんじゃないかなと感じて、そこにみんなが惹かれたのだと思います。「猫は」という部分はもうちょっとひねったり工夫があってもいい歌だとは思いますが、あえて「猫は」というまっすぐな言葉にしたことで、逆にすごく大衆性が生まれているのかなとも感じました。

—優秀賞に選ばれた作品の中で特にお気に入りのものやその印象についてお聞かせください。

「絵本」の短歌ですね。すごく可愛いなと思いました。ぼろぼろになるということが、決して悲しさを孕む言葉だけではないということを上手く描いていると感じます。「お母さん」の短歌もすごく好きです。認知症かなと思うのですが、たとえ自分を忘れていくことがあったとしても、親子とは違う新たな関係性（友だち）で一緒にいたいという想いが、すごく健気で愛らしい歌だなと思います。優秀賞に選ばれた作品は、どれも全体的にまっすぐな魅力がありました。

—審査員賞の選定理由や、お気に入りの作品とその印象についてお聞かせください。

まずは「猿の短歌」です。「さびしさを猿に預けてきたけれど猿がさびしくわたしもさびしい」という歌なのですが、あまり意味が分からないじゃないですか（笑）。その意味が分からないところが、逆にちょっと面白くて良かったです。あとは「ひやむぎ」の短歌「ひやむぎのぴんくい奴に付けていた名前を今から呼ぶよ、せーの」も良いですね。犬とか猿とかもししたら同じ人かも（笑）。「ぴんくい奴」に名前を付けていたんでしょうね。亡くなった方が別れてしまった方は分からないですが、そのぴんくいひやむぎを見るたびにその人のことを想ってしまう。目の前にはいないけど「せーの」って一緒に呼びかけている情景が見えて素敵だなと。存在証明という、人が生きる上で大切なものを描いていると感じてすごく好きです。

—今回の審査において、特に大切にされていた基準はありますか？

プロのお二人（木下さん、土門さん）がいらっしゃるので、私は感覚というか、「おもしろい」とか「意味分からへんな」という直感を一番大切に選びました。それが審査員賞の選定にそのまま表れているかなと思います。

—最近、感情が揺さぶられて「泣きそうになった瞬間」はありましたか？

映画や音楽で泣いたという話ではないのですが…。この間乗ったタクシーでの出来事です。タクシーの運転手さんに行き先を伝えたら「申し訳ございません、分かりません」と言われて、別のことで落ち込んでいたこともあり、少しイラッとして「有名（な場所）ですよ！」って言っちゃったんです。本当に人として底が知れる話で情けないんですけど（笑）。「本当に申し訳ありません」と言われながら、目的地に着いた時、運転手さんが「あちらがその有名なところですか？ 今日で覚えておきます」と仰って。そう言われた時に「自分は何て小さい人間なんや」と自分の情けなさに泣きそうになってしまいました（笑）。本当に申し訳なかったです。

【木下龍也さん インタビュー】



—想定（6,500首）を遥かに超える「44,705首」もの応募が集まったことへの感想をお聞かせください。

雑誌やテレビで選者をする機会がありますが、それとは比べものにならないほどの膨大な応募数だったので、率直に「そんなに来るんだ！」と驚きました。これだけ多くなると似たようなアイデア（同案多数）の歌も増えてくるので、どういう工夫やひねりを加えて頭ひとつ抜けているか、という視点で選んでいきました。数の多さには震えましたが、それだけた

くさんの歌を浴びることができたという良い経験になりました。たぶんこれ以上の数は今後ないでしょうから、これほどの数を読んだという経験があれば、今後どんな選者の仕事も来ても「あのときよりは大丈夫だな」と思えそうです。

—最優秀賞に選ばれた作品についてのコメントをお聞かせください。

亡くなったペットの歌は多くありましたが、この歌は描き方が特殊でしたね。「四角く色濃くて」という表現から、猫用のマットや座布団を十二年間敷いていたからこそ、そこだけが日焼けせずに真新しいという情景が浮かんできます。猫そのものではなく、その猫が残した影を書いて姿や一緒に過ごした日々を立ち上げるようなつくりになっていて、作者の寂しさが読み手であるこちらにも映像的に伝わってきました。「十二年」という具体的な数字は音数的に十五年、十四年などに調整できるなかであえて使われており、それによってリアリティが宿っているというか、本当なんだな、とその数字が信じさせてくれる部分もあって惹かれました。猫を飼っていない僕もその部屋の一角が目に見え、浮かびましたし、広く深く胸を打つ作品かと思います。

—優秀賞の選考基準と作品についての印象をお聞かせください。

短歌に馴染みがない人の目に触れた時にどう受け取られるか、を意識して選びました。分かりやすいとか早く伝えれば良いというだけでなく、家に帰ってから「あれ良かったな」と後からじわじわ思い出したり、ティッシュと一緒に生活をしていてある日気付くみたいのもでも良いなと思って。あとは方向性のバリエーションを出そうという意識がありました。「だいすきな絵本のようにそばにいて愛されながらぼろぼろになる」は時代や年齢を問わない歌だと思えますし、「お母さんいつか私を忘れたら今度は友だちになってよね」も、読む人が今何歳であっても「いつかこういう時が来ても、この歌があれば耐えられるんじゃないか」と思わせてくれるお守りになるなと思って選びました。

—審査員賞の選定理由や、お気に入りの作品とその印象についてお聞かせください。

最優秀賞、優秀賞は短歌として上手いのはもちろん、泣けるかどうかを重視して話し合いの上で選びました。が、審査員賞は個人的な好みというか、歌人としてこれは落とせないというものを選びました。アイデアやテクニックや特殊さを見せつけられるのはとてもとても好きです。特に「プリンには名前を書いておいたのに愛には書いてなかったせいで」は特殊ですよ。言いさしそのまま終わる歌ですが、愛には名前を書いてなかったからどこかへ行ってしまった、他の誰かに取られたんだと読み解ける歌で、結構怖い。そもそも愛には名前を書けないんだからどうしたらいいんだよという当然浮かぶであろう疑問への回答もない。でも愛ってこれをしたから大丈夫とかなしに失くってしまうものだから、この歌を読んで、あのと名前を書いておけば、と思えたら泣きながらちょっと笑えるかもしれない。

—全体の審査を終えての総括と、短歌を残すことの意義についてお聞かせください。

短歌を読んでいて意図せず涙が出ることはあっても、最初から「泣けるかどうか」という意識で選歌するのは初めての経験でした。泣いてもらうための短歌をつくるのは難しい。僕には無理です。だからこの困難を投稿者の皆さんがどうクリアしてくるのだろう、と期待も心配もしていました。ですが、杞憂でした。みなさんそれぞれがその人にしか書けないであろうと信じさせてくれる歌をお送りくださっていたからです。個を深く掘っていけば、他者や全体に繋がるのかもしれないと思わせてくれる歌もたくさんありました。人は忘れる生き物です。大きな悲しみや寂しささえ、その大きさのまま抱えていることはできない。けれど、短歌は抱えていてくれます。丁寧にすれば、10年後でも100年後でも。だから僕は忘れることを許すために、しかしせつかくの感情や風景を保存しておくために、日々を短歌に残しているのだと思います。そして短歌はときおり、遠くまで届いて他者の胸を揺さぶることがあります。今回の賞を通じて多くの方が短歌に触れてくれたら嬉しいです。

【土門蘭さん インタビュー】



—想定（6,500首）を遥かに超える「44,705首」もの応募が集まったことへの感想をお聞かせください。

まずはこんなに多く集まったことに驚きました。もしかしたら皆さんの中にもともと「短歌を詠みたい」という想いがあって、今回の企画がそれを引き出すきっかけになったのではないかと思うと嬉しいです。「泣く」というテーマもすごく良かったと思います。「笑う」や「怒る」は人と一緒に表現できるものですが、「泣く」は人前ではなかなかできないもので、一人ひと

りの固有のプライベートな経験になることが多い。だからこそ、自分の中にある記憶や感情を言葉にしやすいテーマだったのでは感じます。それぞれの人生の一場面に触れたような感覚があって、思わず涙を流してしまいました。

—最優秀賞に選ばれた作品についてのコメントをお聞かせください。

まず「そこだけが床は四角く色濃くて」という表現が印象的で、作者の部屋のイメージがふっと浮かび上がるようにした。きっと、猫のためのマットが敷かれていたのでしょうね。太陽や照明の光で床が色褪せていく中、マットが敷かれていた部分だけが色濃く残っている。「十二年」という時間の蓄積と、今の猫の不在が鮮やかに表現されていて、いなくなったことへの寂しさと共に、今も一緒にいるような愛情を感じる短歌だと思いました。

—優秀賞に選ばれた作品の中で特にお気に入りものやその印象、選考基準についてお聞かせください。

「お母さんいつか私を忘れたら今度は友だちになってよね」という短歌が特に好きでした。どういう背景の歌なのか考えてみたのですが、これは母が亡くなった短歌としても、母とともに生きている短歌としても読めるなと思ったんです。もし母が亡くなった短歌ならば、お母さんが生まれ変わって私を忘れたら「今度は友だちになってよね」と言っているのかもしれない。もし母と共に生きている短歌なら、母子としてはうまく関係性が築けなかったけれど、歳をとって私のことを忘れたら「今度は友だちになってよね」と言っているのかもしれない。母との関係性がどうであれ、希望が持てる歌であることに惹かれました。

—審査員賞の選定理由や、お気に入りの作品とその印象についてお聞かせください。

「身体性があること（身体を通して言葉を獲得しているか）」、「固有性・独自性があること（本人にしかない経験から生まれているか）」、「短歌から世界が立ち上がること（情景やイメージが浮かぶか）」という三つのことを意識して、それらをより多く満たしている作品を選びました。結果として、親やペットなど、身近な存在の喪失を描いた短歌を多く選んだように思います。

—ご自身の執筆活動（小説、エッセイ、インタビュー等）において、短歌の視点が活きる瞬間はありますか？

私はこれまで様々な手法で文章を書いてきて、その中で短歌も詠んできました。文章を書くには感性とロジックという2つの軸が必要なのですが、短歌の場合はまず感性に全振りしないと詠めないと感じます。「うまい短歌を詠みたい」とか「共感してほしい」という思考から詠み始めてしまうと、私の場合、つまらないものになってしまう。「どうしてもこれを言葉にしたい！」という、自分の心身で実感したイメージが先にないと短歌が詠めないの、まずは感性に100%委ね、その後にロジックで詰めていくことを大事にしています。そういった、「自分は本当はどう感じたの

か」をまず自分に問う姿勢は、エッセイ、小説はもちろんのこと、インタビュー記事や企業の経営理念など、クライアントワークの文章を書く時にも活かしていると感じます。

■ 担当者インタビュー

日本製紙クレシア マーケティング部長 長谷川 敏彦にキャンペーンの反響に対する想いや、今後の展望などについて聞きました。

—想定（6,500首）を遥かに超える44,705首という大きな反響を受けた率直な気持ちをお教えてください。
率直にびっくりしましたし、嬉しかったです。予想していた6,500首でも低いハードルではないと思っていたのですが、日々ご応募いただいた数が増えていき、最終的に4万首を超えました。X主体での告知だったこともあり、正確な属性は分かりませんが、若い世代の方々が短歌に強い興味を持っていることを肌で実感しました。

—今回の「クリネックス涙腺短歌」を通じて皆さんの涙を拭うことができたか、ブランドとしての想いをお聞かせください。

涙がこぼれ落ちた時には「クリネックス」でそっと拭っていただけるような企画にしたいという想いで実施しました。その傍らに「クリネックス」があり、皆様の涙に寄り添うことができたなら、これほど嬉しいことはありません。素晴らしい作品が数多く寄せられ、選考も大変だったことと思いますが、選んでくださった審査員の皆様、そして応募くださった皆様に心から感謝申し上げます。